

# 新潟における戦争の記憶



「撫順戦犯管理所跡に中帰連関係者により建立された記念碑」  
(2016年9月 児嶋撮影)

児嶋俊郎

## 地域志向教育研究とは

平成 29 年 3 月 長岡大学地（知）の拠点整備事業推進本部

長岡大学の「長岡地域＜創造人材＞に関する調査研究」は、平成 25 年 9 月に、文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」＝大学 C O C 事業（平成 25 ～ 29 年度）に認定されました。

＜地域志向教育研究＞は、この事業の 1 つであり、次のような内容・特徴を持っています。

- a 目的・・・地域（新潟・長岡地域）課題解決をめざして、地域課題の教育研究に取組む地域志向の大学教員を増やすこと。
- b 対象・・・教育・研究・社会貢献を地域志向に改革しようとする本学専任教員とする。
- c 進め方・・・平成 25 年 9 月に＜長岡大学「地域志向教育研究」の推進について＞を定めて、次の方針・ルールで実施しています。
  - ・毎年 5 月に地域志向教育研究の公募を行い、公正な審査を経て採否を決定する。
  - ・審査は、取組内容の有効性（地域課題との関連）、取組期間（年度末までに成果をあげられるか。支給契約は単年度とする）、推進体制と経費（体制、費用面で円滑に推進できるか）の 3 点で行う。
  - ・なるべく多くの教員の取組みをめざすが、毎年、概ね 5 名・件以上の教育研究を行う。
  - ・教育研究経費は長岡大学の規定に基づいて運用する。予算は 50 万円／1 件程度とする。
  - ・当該年度末には、報告者を提出し、成果報告を行うこと。

## 平成28年度の長岡大学地域志向教育研究テーマ一覧

☆平成 28 年度に実施された地域志向教育研究のテーマの一覧は次の通りです。

教員名	調査研究課題
米山 宗久	発達段階による「子育て」に関する親の意識変化
栗井 英大	新潟県内中小企業における事業承継の現状と課題
西俣 先子	新潟県の中小・地域金融機関による環境金融の現状と県内企業の環境金融活用の現状を探るための調査
中村 大輔	長岡市域の製造業における管理会計システムの普及に関する研究（継続）
兒嶋 俊郎	新潟における戦争の記憶
山川 智子	長岡市近郊及び新潟県内の温泉における地域資源としての活用の傾向分析

☆本ブックレットは平成 28 年度＜地域志向教育研究＞の成果をまとめたものであります。

平成 28 年度地域志向教育研究発表会は、平成 29 年 2 月 2 日(水)に開催されました。

# 新潟における戦争の記憶

－ 記憶を記録へ 記録を理念へ －

長岡大学教授 児嶋 俊郎

## [目次]

はじめに

- 1 戦争の記憶と記録
- 2 記念館の機能と役割
- 3 証言記録の力
- 4 平和記念館の役割・戦争の総括 : 記録保全の体制確立を
- 5 まとめ - 新潟県の特徴

## はじめに

人の記憶は容易に風化し、その人が亡くなってしまえば永遠に失われてしまう。だからこそその記憶を記録として後世に残していくことが重要である。記録が残されている限り、過去を検証し、そこから学ぶことが可能だからである。逆に正確な記録が存在しなければ、過去を無批判に賛美するような、無責任な言説が生じやすい。以下においては長岡戦災資料館と津南の戦争記録を中心に、新潟の戦争記録のありようを検討しつつ、それを後世に生かすための手だてを考えてみたい。

## 1 戦争の記憶と記録

### (1) 占領下における日本人の太平洋戦争認識とアジア観

まず始めに戦争の記憶がどのように記録化され、それが日本人の戦争観に影響を与えたかを検討しよう。吉田裕は戦後日本人が戦争の記録にどのように接して来たかを次のように整理している<sup>1</sup>。

まず日本人が当面したのは一億総懺悔論であった。一億総懺悔論とは、敗戦に至った状況で、その責任を天皇や戦争指導部に向けないため、全国民に敗戦の責任があるという議論であり、次のような論理が展開された。

「ことここに至ったのはもちろん政府の政策がよくなかったからでもあるが、また国民の道義の廃れたのも原因の一つである。この際私は、軍・官・民、国民全体が徹底的に反省し懺悔しなければならぬと思う。全国民総懺悔することがわが国再建の第一歩であり、我が国内団結の第一歩と信ずる。」(朝日新聞 1945年8月30日付)

また9月4日の帝国議会では、敗戦の原因を日米の戦力格差に基づいて説明した(施政方針演説)。

このような議論の展開が目的としたのは、「敗戦の原因をもっぱら物の状況に還元し、責任問題の追及は総懺悔論で遮断する」(古屋哲夫『帝国議会誌』第1期・第48巻 東洋文化社 1979年)というところにあった。

敗戦の「原因」が日米の戦力格差・物量の差に還元され、そのような格差があったにもかかわらず戦争を開始した責任は、「一億総懺悔」で国民一人一人に責任があるとする事で、天皇をはじめとする指導部の開戦責任を回避しようとしたのである。

戦争指導者の責任が回避される一方で、国民の反発や不満は受容されなかった。そのため敗戦後には次のような議論が生じていた。一つは、戦争被害の深刻さや、敗戦後の生活条件の格差。大きな不平等への批判である。そして一億総懺悔論の大前提であった「軍・官・民」の一体が虚偽であることが明瞭になった以上、軍官民一体を前提にした議論は受け入れ困難になったのである<sup>2</sup>。

また政府が展開した敗戦原因論が、かえって戦争の無謀さを明らかにして、その責任が問われることになった。例えば以下のような議論が登場したのである。

<sup>1</sup> 吉田裕「第二章 『太平洋戦争史観』の成立」(『日本人の戦争観』岩波書店 1995年)

<sup>2</sup> 『東京大空襲・戦災誌5』東京空襲を記録する会 1974年

「我々は戦勝のためにあらゆる無理を我慢してきたが、国力の真相を知って指導者の欺瞞政策であったことがわかりました」「なぜ忠良なる国民を信用し真相を発表しなかったか遺憾である」「従来の指導当局は国民が総懺悔する前に自ら責任を負うべきだ」(愛知県知事の9月8日付報告、前掲吉田書)

このような状況の中でGHQが介入を開始する。GHQの議論の特徴は、(1)指導者責任論の成立、(2)対アジア責任の欠落、(3)国民自身の戦争責任論の欠落、という所にある。このような議論は国民には受け入れやすいものであった。なぜなら、一般国民は指導者に騙されていた気の毒な犠牲者であり、一人一人の日本国民の戦争責任は問わないとするものだったからである。植民地支配や広大な占領地域で日本人がどのような立場で、何をしていたのか、一切問われることのない議論であった<sup>3</sup>。GHQは自らの見解を日本国民に周知するため、1945年12月8日から全ての全国紙に「太平洋戦争史 - 真実なき軍国日本の崩壊」(計20回)を掲載した。これはGHQによる日本人再教育プランの一環であり、記事の執筆は、民間情報局(CIE)の企画課長(戦時中は戦時情報局勤務で心理戦に従事していた)ブラッドフォード・スミスが担当した<sup>4</sup>。

さらにGHQは、12月9日からNHKラジオで連続放送「真相はこうだ」を放送した。その目的は「日本の国民に対し、戦争への段階と、戦争の真相を明らかにし、日本を破滅と敗北とに導いた軍国主義者のリーダーの犯罪と責任を、日本の聴取者の心に植え付ける」ことであった。(前掲吉田書)

そこでGHQが提示した歴史観は次のようなものであった。

- (1) 日本の侵略戦争の起点を満州事変におき、太平洋戦争までを一連のものと捉える。台湾・朝鮮植民地統治の問題は欠如している。
- (2) 中国は被侵略地としてのみ描かれ、中国の対日抗戦の意義には考慮が払われていない。
- (3) アジア・太平洋戦争についてはアメリカの巨大な戦力が最大の貢献をなしたと描かれる。
- (4) 軍部を中心にした「軍国主義者」のみの責任が問われ、天皇・宮中グループ、財界人、新聞人などは「穏健派」として軍国主義者に対立したものとして描かれる。
- (5) 日本国民に対しては国民を騙した軍国主義者と騙された国民という歴史理解を提示。

この議論には、原爆投下や無差別爆撃を行ったアメリカを立場が正当化するとともに、アメリカが主導する戦犯裁判の結果を日本人に受け入れさせるための準備という側面があった。そして日本国民は一部に反発があったものの、この見解を受け入れていったのである<sup>5</sup>。

なかでも日本人はアメリカの物量に圧倒されたのである。という考え方は広く浸透し、それは中国の抗戦や、朝鮮の独立運動に負けたという自覚を日本人に持たせない結果となった。吉田裕は、1945年12月にアメリカ国務省図実施した日本人の対アジア認識に関する調査を紹介しているが、それによれば、「日本国民は他の極東の民族より優れている」という項目に86%が、「はい」と答えている。このような日本人の優越意識にGHQの宣伝はよく合致し、その意識を補強する結果となった<sup>6</sup>。

<sup>3</sup> 植民地朝鮮の立場から、敗戦後植民地責任を問う声が上がっていた。詳しくは、鄭栄恒「解放直後の在日朝鮮人運動と『戦争責任』論(1945-1949) - 戦犯裁判と『親日派処罰をめぐって』」『日本植民地研究』No.28 2016年6月所収

<sup>4</sup> 前掲吉田書

<sup>5</sup> このような宣伝には当然当時も批判があった。たとえばマーク・ゲインは『ニッポン日記』(1963年)で、「・・・あの臆病な総理大臣幣原喜重郎が、軍国主義の果敢な敵として描写される。攻撃は主として軍人に集中され、天皇や財閥の首脳のような歴然たる戦争犯罪人は除外されている」と述べている。

<sup>6</sup> G.マコーミックは『属国』(凱風社 2008年)のなかで、米軍の心理作戦部隊が展開したこのような議論が、今日まで深刻な影響を及ぼしていることを次のように指摘している。「日本占領に当たって、日本をアジアから切り離して米国につなぎ止めておくためには、近代天皇制の核心は変更せずに戦後日本を天皇を中心にした国家として再構築した方がいいと考えた。こうした計略の最良の結果といってもいいが、日本ではこれが米国の押しつけととらえられず、米国は日本人の心の奥底をよく理解してくれたと賞賛した。[略]占領軍戦時情報局が作り出した天皇中心の日本人というアイデンティティが無批判に再生産された。その過程で、日本人が優秀な民族で他のアジア諸国とは違うという自己認識に根ざす差別や偏見も次々と生み出された。日本人の中に日本人は優秀で他のアジア諸国とは違うと思いついでいる人が多数をしめている限り、いかなるアジア共同体も生まれず[略]。そういう日本と中国との協力関係は成立しない。」

「従って天皇を戦後日本の中心に据えたことは、数十年前に米国務省が予見したとおり、まさに米国の利益にかなったのだ。安倍や御手洗は、「天皇を戴く世界に類のない日本」という自己中心型の国を理想としているようだが、こうしたネオナショナリズム的発想は、日本をますます周囲から孤立させ米国への依存を深めるだけだ。」(282~283頁)

もっとも当時も日本人のアジアに対する加害責任や、アメリカ主導の戦争観に疑問を呈するものはあった。戒能通孝は「中日戦争と太平洋戦争」<sup>7</sup>の中で、太平洋戦争が日中戦争の延長に過ぎなかったと指摘し、中国との戦いが戦争の基本だったことを指摘した。同時に国民の側に戦争支持の姿勢があったことも指摘していた。しかしこの論文はGHQの検閲によって削除され、一般の目に触れることはなかったのである。

(2) 日本人の戦争観はどのように形成されて来たのか

このように敗戦後に形成された日本人の戦争観はGHQの情報操作に深刻に影響されていた。それは日本人の大半を戦争被害者と見なし、アジアにおける侵略や植民地支配から免責するものであった。このような見方は、戦争の惨禍に打ち拉がれるとともに、アジアの人々に対する深刻な偏見と蔑視に囚われていた日本人にとって受け入れやすいものであった。このような見方は、戦場体験者の記憶が社会に拡大する中で、一面で拡大され、他面で修正された。

保坂正康『戦場体験者 沈黙の記録』<sup>8</sup>は、この70年間の戦史、回想、自伝等の特徴を以下のように整理している。

- (1) 昭和二七年四月二八日までの占領期にはGHQの許可する戦史、戦記以外の刊行は許されなかった
- (2) 独立回復から昭和五〇年頃までの期間は日中戦争史、太平洋戦争史と、主に参謀たちによる大本営主導の戦記通史が中心であった。
- (3) 昭和五〇年代初めから昭和の終わり頃までは戦友会が刊行する戦史、従軍体験のあるジャーナリストや尉官クラスの戦史が多かったが、同時に戦争を知らない世代のノンフィクションや戦記が登場する。
- (4) 太平洋戦争終結から五〇年を迎えた平成七年[略]のピーク時には、戦争体験世代の手記や回想録が多く刊行されたが、一般の兵士の手記は極端に少ない。
- (5) 平成一二年頃から一般兵士の証言が軸になる書が目立つようになる。兵士個々人は書籍を刊行する余裕がないために主にジャーナリズムによってまとめられるケースが多かった。(10頁)

第一期では、先にふれたとおりGHQ的歴史観が喧伝された時期であり、第二期以降日本人による「自由」な出版が可能になったが、その「自由」には問題があった。まず(2)の時期は旧軍幹部による戦争史であり、それには次のような問題があった。

保坂は以下のように指摘している。

「参謀たちの戦史は、[略]こういう状況認識を持って、このような命令を下したという内容がほとんどであり、現場での戦闘準備が悪かったとか戦争に対する認識が甘かった等という理由をつけて、自らを免罪する内容が多かった。」(保坂書 10頁)

その典型としては服部卓四郎の『大東亜戦争史』(初版 1953年)がある。保坂によれば服部は、「戦後はGHQの歴史課の職員にもなり、当時餓えの中にいた日本国民とは全く逆に、アメリカの物資を与えられて考えられないほどの贅沢な生活をした。加えてGHQの威光のもと、日本陸海軍の軍人を次々にGHQに呼びつけて戦史の記述を進めた。むろんこれはアメリカの意に沿うと同時に、自分たちの軍事戦略を正当化するための資料作りのためでもあった。[略]この書は大本営参謀の弁明や開き直りが主になっていて、一般兵士の心情(つまり非日常空間に身を置く過酷さ)等に思いを馳せている筆調は全くない。」(保坂書 11頁)という内容であった。

また吉田裕も「作戦指導・戦争指導という限定された狭い視角からみた戦争史の叙述に終始している。[略]実際には各戦域の作戦参謀クラスの旧幕僚将校が分担執筆し、元大本営参謀の稲葉正夫が全体の取りまとめに当たったものである。その意味でも幕僚将校の典型的な思考様式を映し出した著作だと言えるだろう」(前掲吉田『日本人の戦争観』 87頁)としている。

さらに日中戦争や東南アジアで大きな比重を占めたゲリラ戦を省いたのはなぜかを長谷川慶太郎が服部卓四郎に訊ねたところ、「『我々は正規軍であり、戦史というのは正規軍同士の戦闘を扱うものだから、ゲリラ戦など戦局の大勢を動かすものにならないと考えて、省略した』と言われて驚いた記憶がある。」(『近代日本と戦争1』PHP研究所、1985年 前掲吉田書 88頁より再掲)という。

<sup>7</sup> 『中国研究』第六号 1949年所収 吉田裕『日本人の戦争観』より再録。

<sup>8</sup> 『戦場体験者 沈黙の記録』筑摩書房 2015年

ここには旧軍幹部たちのアジア認識・戦争認識の浅薄さと現実遊離が明瞭に浮かび上がっている。しかし服部の著作を自衛隊では今日でも高く評価している。『戦史叢書』はこの著作の基本的観点に立って編纂されたのである。自衛隊の公式戦史の基本はこのような歴史観に立っているのである。

さらに服部や辻政信など、旧軍の中核で戦争指導に関わった彼らには戦争責任への自覚がなかった。開戦時参謀本部作戦課戦力班長だった辻正信、作戦部長だった田中真一、作戦課長だった服部卓四郎等は自らの開戦責任について一言も語っていない。旧軍人でも今村均(元第八方面軍司令官)などは、「明治育ちの陸軍軍人としての思想のルールを変えないままに、そのルール(例えば軍人の政治不関与)を、かつて自分が同時に適用した以上の厳しさを持ってさかのぼって適用し、十五年戦争における軍人たちの行動を反省する[略]」姿勢があった、このような「今村にある深い責任意識」(鶴見俊輔『転向研究』1976年)は、服部等には全く欠如していた。そして戦後史の一時期まで戦争史の解釈を独占したのは、責任の自覚が全くなかった服部等旧軍幕僚将校たちであった。服部等の著作は1950年代の戦記物ブームとともに登場した。それは占領による規制がなくなった後、ナショナリズムの復権とともに世に出たのである。

#### [戦記物の発行点数/ナショナリズムの復権]

このナショナリズム復権とともに登場したのは、服部等の著作だけではなく。以下少し吉田裕の『日本人の戦争観』によって詳しく見てみよう。まず戦記物の刊行点数である。

45年/1点 47年/9点 49年/10点 50年/25点 51年/20点 52年/32点 53年/49点 54年/18点 55年/11点 56年/60点(9月現在) (間評六「戦後・戦記物出版の全貌」『出版ニュース』1956年10月中旬)

また雑誌『丸』の軍事誌化は1956年4月号からであり、この後各種の戦記物や軍事情報が紙面を飾るようになった。

さらに国民の戦記ともいえるべき、『今日の話 戦記版』が刊行され始めた。1954年1月から1962年8月(第104集)まで刊行されたが、空戦記事が多い特徴と、アジアへの加害責任の欠如は明白である(前掲吉田書 91~92頁)。

しかし戦記物の内容に関しても、戦争や日本のアジア侵略に対する批判的視座を含むものも登場し始めた。戦場の第一線で過酷な体験をした一般兵士の実感とは大きく異なっていたからである。『特集文芸春秋日それは本陸海軍の総決算』(1955年2月)は著名な将軍幕僚将校の手記が中心であり、40万部の発行部数を示したが、同時に「将軍や参謀は敗戦の責任者であるのに反省していないという投書が多かった」という。「そこで今度は応招兵が太平洋戦争をどう見ているか、”赤紙一枚で”というテーマで無名の人を中心に体験談、戦争観をまとめてみた。千編ぐらい原稿が集まったが、『戦争はたまらない』というのが大半だった」(田川博一編集長、毎日新聞 1956年4月12日、遠山・今井・藤原『昭和史』(岩波新書 1955年)による)。出版社は、戦争体験を繰り返さないため、そして戦記物などが当事者の「自己弁護」の書であることに危機感を持ち体験記録を刊行することにしたという。

また小説であるが、五味川純平『人間の条件 1~6』(三一新書 1956-58年)は中国東北の日本人と日本軍の残虐行為を文学に取り上げた最初の作品となった。吉本隆明などによる戦争責任の提起は東京裁判や占領期の責任論の風化への危機感にもとづいていた。

これに対して旧軍体験者からは、伊藤正徳『聯合艦隊の最後』(文芸春秋社 1956年)、『帝国陸軍の最後 1~5』(同左 1959~61年)等が登場したが、これは様々な戦史の見解の最大公約数を示すものと言えよう。その特徴は以下の通りである。

- 1 満州事変以降の戦争は、大義名分を欠いた正当化できない戦争であった。
- 2 戦争責任は「戦争を発起した少数の軍閥」が激しく糾弾され、一般将兵は責任がないとされる。それだけでなく彼らの愛国心や犠牲を高く評価する。
- 3 「栄光」の聯合艦隊への強い共感があり、その時代に対するノスタルジアが常に呼び戻されている。
- 4 対中国戦争とアジア・太平洋戦争の連続性が明確に認識されているが、アジア認識には大きな限界があること。特にゲリラ活動に代表される全人民的抵抗には無関心である。
- 5 アジアに対する大国主義的意識と敗戦に至る過程への「反省」が一体のもの。「(敗戦がなければ)領土を失わずにすみ、世界一流の大国として存在し得た」など。

当時一等国民から三等国民への転落、といった表現が一般的に用いられており、その点で国民的共感を呼びうる「歴史観」だったと言える。(前掲吉田『日本人の戦争観』 100~101頁)

(3) 兵士の戦場体験記録はなぜ乏しいのか

先の保坂の整理に戻ると、1970年代半ばまでは、主に参謀たちによる戦史中心であり、その問題点は既に指摘したとおりである。彼らの議論は、戦後のナショナリズム復権の時代に一定浸透したが、それに対する反発もあり、また五味川の小説のように、日本の侵略に対する批判をもった作品も登場しつつあった。その後は1989年頃(昭和の終わり頃)までは、戦友会の発行する戦史や尉官クラスの戦史、そしてジャーナリストの刊行するものが多かったとされる。戦争を知らない世代によるノンフィクションの登場もこの頃である。

1995年、つまり敗戦後五十年の年には、様々な回想や記録の刊行のピークを迎えたが、一般兵士によるものは「極端に少ない」状態であった。それが変化するのは2000年以降である。この頃から一般兵士による証言が目立つようになった。一般兵士だった人々は、自身単独で証言をまとめることが困難なため、ジャーナリズムによってまとめられるケースが多かった。

ただこれは一般の目にふれやすい刊行物についてはその通りだと考えられるが、各地の記念館や自治体、平和運動のグループによってまとめられた証言記録には当事者自身の記録 - 関係者のサポートはある程度あったにしても - が含まれている。この点は後に詳しくふれたい。

ではなぜこのように一般兵士の証言は少なかったのか。保坂は戦友会の役割に注目している。保坂は戦友会取材の体験から、「戦後の日本社会は、一般兵士がその戦場体験を語ることを許さない暗黙の了解を作ってきたのである。一般の兵士たちに、『お前たちが経験してきたことは銃後の国民に語ってはならない』という暗黙の強要が、特に戦友会を通じて行われたといってもよかった」(保坂正康『戦後体験者』12頁)と述べている。そして戦友会という組織の機能として以下の7点をあげている。

- (1) 昭和陸海軍の軍事行動正当化 「軍隊内での階級が生きていて、日中戦争、太平洋戦争の正当化が前提になっている」
- (2) 戦史を一本化するための統制 「一般兵士が『大本営参謀が書いているのは我々の体験した戦闘内容は事実と違いますよね』と言った時、かつて連隊長だった将校が、声を荒げて『おい、一兵士風情が大本営の戦史に口を挟むな』と叱りつけた。その兵士は居ずまいを正して、『はい』と言って俯いた。私はこの時に戦友会の役割を実見したのである。」
- (3) 兵士相互が戦場での行為を癒す
- (4) 戦後社会での人間的支援関係
- (5) 「英霊」に対する追悼と供養
- (6) 軍人恩給支給等の相互扶助
- (7) 選挙時の集票機関としての役割 (以上保坂書 15-16頁)

このように戦友会は、旧軍の規律に従って、旧軍幹部の認識・思想傾向に沿った戦史を生み出す機能を果たしつつ、なおかつ選挙の集票マシンとして政治的影響力も持ったのである。このような統制の下では、戦争の実態がゆがめられたのも当然であった。保坂は以下のような例を挙げている。

- (1) 南京大虐殺のような残虐行為を全面否定するような言説の横行： 現実に残虐な行為を行った部隊の兵士たちは、誰もがその規模の差はあれ、そのような行為に走ったことを認めている(そうした行為を働かなかった部隊の兵士たちと認めていた)。」にもかかわらず全面否定論が横行した。(保坂書 13頁)
- (2) 軍への不満や反抗の記録の抹殺。「特攻隊員の乗った特攻機は、大体がパイロット席の無線がオンになっている。[略](攻撃時の様子を報告するのが伝達される)[略]ところが特攻隊員の中には、全く予想外のことを口にするものがいた。司令部の参謀が個人的に書き残していた日記を見たことがあるが、そこには『海軍の馬鹿野郎等の言もあった。』」(保坂書 13頁)

保坂はこのような事実を前提に、「日本社会が戦場体験を伝える時にかなり恣意的にその事実を選択しているということであり、そのために私たちは客観的にこの戦争体験を分析し得ないでいるというのが実際の姿」だと述べている。(保坂書 14頁)



## 2 記念館の機能と役割

ここで各地に存在する戦争に関する記念館の役割を考えてみたい。記念館の活動はここまで述べてきた歴史のゆがみを是正する機能と、それを促進する機能の双方を担った。その違いは記念館がどのような観点に立ち、何を目的として活動するかによる。そこで日本における戦争に関わる記念館を三種類に分けて考えたい。

まず一つは平和運動、あるいは反戦の立場で設立された記念館である。代表的なものとしては、広島平和資料館、東京大空襲戦災資料館、女たちの戦争と平和資料館(WAM)などがある。以下では平和記念館と呼ぶことにする。その多くは戦争の被害の観点から設立されたもので、慰霊という観点も設立の経緯には含まれるものがある。長岡の戦災資料館もこの中に含まれる。この中で加害責任を自覚する立場にたって設立されたものが中帰連平和記念館である。これはほぼ唯一の例外的存在だと言ってよいだろう。

二番目にあげられるのは、過去の戦争を顕彰する立場の施設であり、これは自衛隊を中心に一部の国や自治体の施設(もちろん民間の施設もある)に見られる。新潟県内では新発田の白壁兵舎広報資料館が代表例であり、長岡市の山本五十六記念館にも広くはこの区分に入るだろう。以下では顕彰施設と呼ぶ。

第三に慰霊ということを全面に掲げている施設である。第一・第二の記念施設もその出発点で慰霊という性格をかねているものが少なくないのだが、慰霊を前面に出したものである。その典型は靖国神社であり、その付属施設である遊就館である。かつて軍事施設の一つとして、また国家神道の神社として、帝国日本の戦争体制を支えた施設が、当時の理念を今に残していることが大きな問題を引き起こしていることは周知の通りである。しかし今日靖国神社は独立の宗教法人であり、日本国家の公式の慰霊施設ではない。それは千鳥ヶ淵戦没者苑である。しかしこちらには遊就館のような記念館・博物館的施設は付随していない。以下では必要があれば慰霊施設と呼ぶ。

これらの施設は、そのよって立つ考えは異なっても、いずれも(千鳥ヶ淵は別だが)戦争の様々な記録を収集・集積している場合が少なくない。そもそも資料の集積が記念館の設立に繋がった例も少なくない(東京大空襲戦災資料館等はその一例)。また社会に対してそれぞれの観点から働きかけを行っている。それは1で述べたような経路とは異なる、戦争証言の蓄積であり、また様々な活動 - 児童生徒への戦争体験者の語りやスタディー・ツアーの実施等 - を通じて、市民の戦争認識(歴史認識)形成に影響を与えているのである。慰霊施設である靖国神社の遊就館は、神社自体は慰霊施設であるが、遊就館は極端な顕彰施設だと言える。私の見る所、ほぼ帝国日本の戦争や植民地支配を全面肯定する内容の展示と歴史観が提示されている。それは戦後旧軍関係者が公式化しようとしてつとめた戦争観・歴史観の極端な例と言える。そして遊就館はそのような観点から資料の集積や広報活動を行っている。以下においてはまず各施設の概況を簡単に紹介し、その上で3・4において、証言そのものの内容を検討してみたい。

### (1) 平和記念館

実は日本には平和記念館がとても多く、約300館あるといわれる。そのような団体の一部が集まって「平和のための博物館・市民ネットワーク」が運営されている。ネットワークは1999年から運営されており、年一回全国大会を開催している。2016年度は10月30日に福島県白河市のアウシュビッツ平和博物館で開催された。事務局はながらく東京大空襲・戦災資料センターに置かれて来たが、2010年2月から「戦争と平和の資料館 ピースあいち」に移っている。このネットワークは1999年から年2回機関紙ミューズを日本語と英語で発行している。最新号は2016年12月発行のNo.36である。以下では36と35にもとづいてネットワークに参加している記念館の活動を簡単に紹介したい。No.35には、国内66の様々な記念館の活動が掲載されている。また国外ではイギリスのブラッドフォード平和博物館が紹介されている。国内の記念館の活動のいくつかを以下で紹介する。

- ・女たちの戦争と平和資料館(WAM、東京)：慰安婦問題にも積極的に取り組む。韓国の運動とも連携。
- ・NPO 法人ホロコースト教育資料センター(Kokoro)：「ハンナの鞆」「杉原千畝」「アンネ・フランク」等を教材とした教育活動。アウシュビッツ等への大学生のスタディツアーも実施。
- ・山梨平和ミュージアム：戦後70周年記念「戦場体験に見るあの戦争の実相」など、一部に石橋湛山関係の資料の展示も。
- ・中帰連平和記念館：年三回の理事会に併せて「勉強会」を開催。2016年度は11月13日に「ウエスタ川越」で十周年記念イベントを開催。
- ・第五福竜丸展示館：開館40周年。常設展示の「核爆発実験年表」「第五福竜丸展示館の歩み・年表」リニューアル。小中学校生や高校・大学の団体を迎えている。



- ・川崎市平和館：「平和学的に社会を見る」4回講座を実施。
- ・満蒙開拓平和記念館(長野)：常設展示、帰還者の証言記録と映像資料等。
- ・立命館大学国際平和ミュージアム：世界報道写真展2016開催他
- ・平和資料館・草の家：「731部隊と高知」「沖縄戦と高知」等2015年7月には、館のスタッフと高知大学の学生で、「15年戦争の加害と被害 戦争に反対した高知の人々」実施。
- ・明治大学平和教育登戸研究所資料館：陸軍登戸研究所を中心にした展示と活動
- ・岡まさはる記念長崎平和資料館：10月に設立20周年イベントを実施。立命館大学の徐勝教授の講演「東アジアとは何か - 日本のアジア侵略とヘゲモニー -」を実施。軍艦島の世界文化遺産登録に伴って、韓国から来館者が多かった。
- ・ひめゆり平和記念館：2015年12月22日から、戦後70年特別展「ひめゆり学徒隊の引率教師たち」を開催。図録『ひめゆり学徒隊の引率教師たち』刊行。2016年3月14日・28日には平和ガイド・バスガイド対象の「ガイド講習会」を、27日には「教員向けガイドツアー」を実施。
- ・不屈館 - 瀬長亀次郎と民衆資料：3周年記念の企画展として石川文洋氏の写真展等を実施。
- ・佐喜真美術館(沖縄)：ジョルジュ・ルオー展開催。常設展示は、丸木夫妻の「沖縄戦の図」。

以上の他にも、2015年に戦後70年記念の展示が各地で実施された情報を53件のせている。実施主体は公的な資料館・博物館が27件。公立の図書館・文書館が7件。大学が8件(拓殖大学、中央大学、法政大学、専修大学、明治大学、京都大学、神戸大学、奈良大学)。文学館・美術館その他資料館などが11件となっている。

新潟関係では、三条市歴史民俗産業資料館が、2015年8月11日から9月13日にかけて、「戦後70年あの頃の暮らし」を開催している。その内容は、「三条は長岡のように空襲を受けることはありませんでしたが、人々は軍需産業へ動員され、生活物資を制限されるなど、苦しい暮らしを余儀なくされました。身近な歴史を振り返り、平和について考えてみる展示会でした」と紹介されている。

これらの記念館は設立主体も活動内容も様々であるが、展示などの活動を見ると戦争の悲惨さを後世に伝え、同じ過ちを繰り返してはならないという観点に立っていることは、ほぼ間違いないであろう。また簡単な紹介であるが、上記の紹介によっても、被害だけではなく、加害の問題や日本の戦争責任を問う姿勢をもっている記念館があることも分かる。

例えばWAMは従軍慰安婦問題に取り組み、旧軍の戦争犯罪の追求を韓国の市民運動とも連携しつつ展開して来た。加害責任を被害国と連帯して追及し、社会的正義の実現を目指すことが、活動を支える理念になっている。また女性に対する性暴力根絶といった観点も存在し、ジェンダー的観点の広がりや深まりの中で、活動が展開されて来たことが伺える。明治大学の登戸研究所資料館は、旧陸軍の秘密作戦のための研究開発の足跡を掘り起こして展示している。これも軍事研究の実態を明らかにするという観点に立った活動である。平和記念館の多くは日本が受けた戦争被害の悲惨さの記憶を出発点として成立しているが、その活動を通じて日本帝国の加害の側面、そして戦時期日本人が加害者でもあったという事実に向かうものがあらわれて来ている。

その中で元々加害者としての自覚と反省に立って設立されたのが、NPO 中帰連平和記念館である。この記念館の設立主体は、中国帰還者連絡会に集まった旧軍人等である。彼らが自らの高齢を自覚し、自分たちで資金を出し合って2006年11月に設立した記念館である。

彼らは敗戦後様々な経緯をへて、遼寧省撫順と山西省太原の戦犯管理所に収容された。その数1109名の戦犯たちは、収容所における中国側の粘り強い認罪教育を通じて、自らの行為の犯罪性を自覚した。彼らの多くは大日本帝国の軍国主義教育と軍隊訓練、そして苛烈な戦場体験によって、歪んだ日本人優越思想と殺戮への無自覚に陥っていたが、読書や討論、文芸活動や演劇活動などを通じて軍国日本の思想から自由になっていったのである<sup>9</sup>。

<sup>9</sup> 中帰連のメンバーの一人で例えば絵嶋毅氏は「どの部隊でも「戦友会」を作って集まりをもっています。僕もその戦友会に出席したことはありますが、そこでは過去自分たちが戦争で行った行為などに着いて反省などは一言もでません。[略]あの戦争は正義の戦争[略]自衛の戦争であったと当時の政府の宣伝を飲み込んだままなのです。だから中国で犯した、人を殺したことも全て日本のためである、という考えのままです。[略]そんなことより、日本で通常の社会では絶対にできない悪事ができた。それが楽しかった、という話をするのです。中国人の食料をとったり、牛や驢馬を売り飛ばして金儲けをした、という「楽しいこと」だけが心に残っているのです。」と語っている。(2014年5月20日)

彼らは 1956 年撫順・太源の法廷で 45 人が起訴されたものの、その他は無罪・その日のうちに釈放となり、1964 年までに、起訴されたものも含むほとんどが帰国した。彼らは帰国後- 全員ではないが -中国帰還者連絡会を組織し、「赤」あるいは中共の手先、といった中傷を受けつつ、かつての戦争の侵略性や非人道性を証言し、記録に残し、それを基礎に平和運動や日中友好運動に携わった。その活動や体験は、例えば、岡部・荻野・吉田編『中国侵略の証言者たち - 「認罪」の記録を読む』(岩波新書、2010 年)、中国帰還者連絡会『私たちは中国で何をしたか』(三一書房、1987 年)、中国帰還者連絡会編『帰ってきた戦犯たちの後半生 - 中国帰還者連絡会の四〇年 -』(新風書房 1996 年)等で知ることが出来る。また戦犯管理所で戦犯たちの教育に当たった人々の記録も日本語で刊行されており、例えば新井利男資料保存会『中国撫順戦犯管理所の職員』(梨の木舎 2003 年)等がある。

## (2) 顕彰施設

これに対して各種の顕彰施設は全く異なる活動を展開している。慰霊施設に含めた遊就館はもとより、各地の特に自衛隊関係の施設が典型だと言える。以下に全国戦史関連資料館の HP 掲載の内容のうち、顕彰施設と考えられる施設の紹介を示す( [http://www.senshikentei.org/about\\_museum](http://www.senshikentei.org/about_museum) )。各々の施設に関する紹介はサイトの文章そのままであり、それぞれの施設の考え方が良くわかる。なお新潟県新発田市の白壁兵舎広報資料館と上越市の師団長官舎は、このサイト所収ではないが新潟県内の施設であるのでここに含めた。

表 1 全国の顕彰施設

<p>遊就館 東京都</p>	<p>東京・九段の靖国神社の国のために尊い命を捧げられた英霊のご遺徳に触れんがために創建された宝物遺品館。中国の古典、『荀子』勸学篇「君子は居るに必ず郷を擇び、遊ぶに必ず士に就く」から「遊」「就」を依り名付けられた。神社御創立 130 年の平成 14 年、本館を全面改装、展示手法・展示内容も一新し、更に映像ホールを備えた新館を増設。ガラス張りのホールの中に零戦を初め、野外展示物を収納し、世代を越え、多くの方々が訪れている。</p>
<p>那須戦争博物館 群馬県</p>	<p>那須御用邸に隣接する那須戦争博物館は、終戦を満州でむかえ、辛苦のシベリア抑留生活を経験した名物館長栗林白岳さんが私財を擲って収集した実に 1 万 5000 点の資料が展示されている。幕末の英雄や、明治大帝の御宸筆、かたや、映画の撮影のために作られた戦車や、大和ミュージアムに匹敵する巨大な軍艦の模型など。</p>
<p>昭和館 東京都</p>	<p>昭和館は、主に戦没者遺族をはじめとする国民が経験した戦中・戦後（昭和 10 年頃から昭和 30 年頃までをいいます）の国民生活上の労苦についての歴史的資料・情報を収集、保存、展示し、後世代の人々にその労苦を知る機会を提供する施設です。現在約 1 万 8 千点の実物資料が収蔵されており、常設展示室にはそのうちの約 700 点が展示されています。懐かしい昭和レトロの逸品の実物が展示してあります。</p>
<p>記念艦三笠 神奈川県</p>	<p>日露戦争に於て東郷司令長官が座乗した連合艦隊旗艦三笠は、日本海海戦で、ロシアのバルチック艦隊と対馬沖で戦い、海戦史上例を見ない圧倒的勝利に大きく貢献しました。日露戦争は、帝政ロシアの極東進出により、存亡の危機に立たされた日本国民一人一人が力を合せて戦い抜いた防衛戦争であり、この戦いに勝ったことにより、日本は独立と安全を維持し、世界の抑圧された諸国に自立の希望を与えました。大東亜戦争敗戦後、占領軍の命令により大砲、マスト、艦橋などが撤去され、見る影もなく荒れ果てましたが、昭和 36 年（1961 年）に現在の姿に再建されました。艦内では、日本海海戦をジオラマで再現しています。</p>

香港フェニックステレビのインタビューより) 中帰連のメンバーの視点を通すことによって、敗戦後帰国した旧日本兵の多くが、戦争について自覚的に再検討することなしに戦後社会を生きたことが分かるであろう。

<p>しょうけい館 東京都</p>	<p>靖国神社の大鳥居を出て参道を下っていくと昭和館があり、さらに下っていくと「しょうけい館」があります。しょうけい館は、平成18年3月に開館し、(財)日本傷痍軍人会が厚労省の委託を受け運営しています。戦傷病者の方々の労苦をお伝えしようと戦傷病者と援護の歩み、映像資料、寄贈された展示物を興味深く展示構成しています。野戦病院ジオラマや特別展示、そして、図書閲覧室、各種情報検索も充実し、証言映像も貸し出しています。ここの空間は、他では得られない貴重な情報に満ちています。館名の「しょうけい」は、後世に語りつぐという「承継」からきています。</p>
<p>彰古館 東京都 (自衛隊三宿駐屯地 陸上自衛隊衛星学校内)</p>	<p>彰古館は戦時医療を中心とした史料館です。昭和31年1月27日、陸上自衛隊衛生学校 教育部 教材課に設置された「参考品展示室」を母体として、軍事医療の史料を収集・展示している医学情報史料の公開施設です。博物館法に準拠して専従の学芸員を配置した自衛隊唯一の資料館でもあります。どなたでも見学出来ます。要予約。(見学は平日のみ)。</p>
<p>大和ミュージアム 広島県</p>	<p>呉海軍工廠が設置され、戦艦「大和」を建造した東洋一の軍港呉市。戦後は世界最大のタンカーを数多く建造するなど、臨海工業都市として発展し、日本の再興に貢献しました。平成17年開館の大和ミュージアムは、日本の近代化の証でもある造船、製鋼を始めとした各種の「科学技術」を紹介し、我が国の歴史と平和の大切さを深く認識し、科学技術立国日本に寄与することを目的としています。何とんでも「男たちのYAMATO」撮影に使われた1/10スケールの戦艦大和は圧巻！ミュージアムグッズも充実しています。</p>
<p>回天記念館 山口県</p>	<p>大戦末期、“戦局を逆転させる”という願いを込め誕生した人間魚雷「回天」。大量の炸薬を搭載し、人間が操縦して敵艦に体当たりするという魚雷型特攻兵器で、隊員の訓練基地が置かれた大津島に史実を語り継ぐために建設され、「回天」に関わる遺品・資料の展示を中心に、当時の時代の背景、生活などをパネルで紹介していて、視聴覚コーナーなどを備えています。徳島から連絡船で渡った大津島は、島全体が、かつての基地の名残を所々に残しています。島全体が、窮地に立つ祖国を守るため、ここから出撃していった多くの若者を慰める慰霊の場所でもあります。</p>
<p>海上自衛隊第一術科 学校 広島県</p>	<p>江田島の第1術科学校の、大正6年に兵学校生徒の精神教育の場として建築された歴史ある大講堂や、明治26年に海軍兵学校生徒館として建築された赤煉瓦の幹部候補生学校庁舎では、NHK制作の「坂野上の雲」の撮影が行なわれています。昭和11年に建築された教育参考館には、戦前からの貴重な資料等を約1,000点を展示しています。また、第1術科学校では、防衛省が大学生向けに、陸海空自衛隊を研修し体験できる意義深い内容の「大学生等サマーツアー」なども行なっています。</p>
<p>知覧特攻平和会館 鹿児島県</p>	<p>特攻平和会館は大戦末期、沖縄決戦において特攻作戦に参加した隊員の遺品や関係資料を、当時の真の姿を後世に残し、恒久の平和を祈念することを目的に展示しています。小泉元首相がここを訪れて、在任中に靖国参拝を欠かさなかったのは有名な話です。展示ホールには、鹿児島県手打港の沖約500メートル、水深約35メートルに海没していたもの引上げた零戦が、戦いの激しさを静かに物語っています。</p>
<p>海軍司令部壕 沖縄県</p>	<p>「壕は語る」「沖縄県民かく戦えり」。当時のままの手掘り跡の残る壕が見学できます。なかでも幕僚室では、手投弾自決したときの破片のあとが当時のままくっきりと残っているのが印象的。</p>

<p>万世特攻平和祈念館 鹿児島県</p>	<p>戦争末期、日本軍の攻撃は特攻ただ一つ、日本三大砂丘の吹上浜にあった終戦間際のわずか4ヶ月間使用された陸軍の特攻基地“万世特攻基地”ここから201名の若者が出撃し命を落としました。万世特攻祈念館の中へ入ると、砂に埋まった軍用機が出迎えます。この飛行機は、“零式三座水上偵察機”で、平成4年に吹上浜より引き上げられ1階の中央に展示され、この迫力が平和への願いを強固なものにしています。</p>
<p>鹿屋航空基地資料館 鹿児島県</p>	<p>鹿屋航空基地は、昭和11年鹿屋海軍航空隊に始まり多くの戦闘に参戦し、捧げた尊い命を悼み、歴史を伝えるため、昭和47年新史料館を設立。改めて、明治維新による海軍の誕生から、終戦によって海軍が終焉するまでの間の、日本近代化の時代を背景とした海軍航空隊の歴史を展示しています。海軍航空隊の誕生と以後の発展の足跡、海軍の歴史最後に位置する神風特別攻撃隊に関する展示などの旧海軍航空隊の興亡の軌跡と、その後、海上自衛隊航空部隊として再建された歩みを伝える展示資料約5,500点を開示するために、新史料館を開設し展示してあります。</p>
<p>白壁兵舎広報資料館 新潟県新発田市</p>	<p>近代日本最初の国軍となったのは1871年(明治4年)、薩摩・長州・土佐3藩からの献兵約1万名で組織された明治政府直属の軍隊、御親兵であり、天皇陛下及び御所の護衛を任務としておりました。1872年(明治5年)明治政府は陸軍省を設置するとともに、フランス陸軍中佐マルクリー以下6名の陸軍士官と10名の下士官を5年間の契約で陸軍教師として招聘(しょうへい)し、その後しばらくの間、フランス式の兵制を取り入れ、軍備を整えていくこととなりました。この建物は、このような時代背景のもと1874年(明治7年)に陸軍東京鎮台歩兵第8番大隊分屯営の兵舎として建築されました。兵舎の建設にあたっては、フランス式の兵制に基づくものの建設は日本の伝統的な技術を有する棟梁が行うため、結果的に小屋組の「トラスと船肘木(ふなひじき)」にみられる様な和洋折衷の形式となっています。また建設当初、四周が白の漆喰(しっくい)で仕上げられていたことから、通称「白壁兵舎」と呼ばれるようになりました。この白壁兵舎には新潟県の郷土部隊である、歩兵第16聯隊、第116聯隊の兵士が起居(ききょ)しておりました。本史料館は、新発田駐屯地東側から移築した歴史的建造物である白壁兵舎を活用し、郷土部隊の歴史を記す資料を中心に、貴重な歴史的資料を多数展示しております。 (HPより、<a href="http://www.mod.go.jp/pco/niigata/HP/sirakabe.html">http://www.mod.go.jp/pco/niigata/HP/sirakabe.html</a> )</p>
<p>高田師団長官舎 新潟県上越市</p>	<p>旧師団長官舎は、明治43年(1910年)、旧日本陸軍高田第13師団長、長岡外史中将によって建てられたもので、市内に残る数少ない明治期の和洋折衷の木造建築物です。平成3年(1991年)までは自衛隊高田駐屯地の幹部宿舎として使われていましたが、明治の貴重な洋風建築保存のため、市が移築、復原したものです。復原にあたっては当時の記録に基づいて、外装、内装をはじめ、家具調度品にいたるまで、できるだけ建設当初に近い形での復原に努めました。 (HPより <a href="http://www.city.joetsu.niigata.jp/soshiki/bunka/sisetu-tourist-kansha.html">http://www.city.joetsu.niigata.jp/soshiki/bunka/sisetu-tourist-kansha.html</a> )</p>
<p>山本五十六記念館 新潟県長岡市</p>	<p>長岡出身の山本五十六元海軍連合艦隊司令長官を慰霊するとともに、記念・顕彰する施設である。その観点は次の通り。「開戦にはあくまでも反対だった。「この身滅ぼすべし、この志奪うべからず」と、わが身の危険を省みず、日独伊三国同盟に断固反対した姿勢は、人々を愛し、郷土を愛し、慈愛の心を強く保っていたからこそである。だが、その意に反し連合艦隊司令長官として未曾有の大戦争の指揮をとった。昭和18年(1943)ブーゲンビル島で戦死。激動の世紀に、しなやかかつ強い心で生きた山本五十六の人間性を、21世紀に語り伝えたいと願う。」(<a href="http://yamamoto-isoroku.com">http://yamamoto-isoroku.com</a>)</p>

遊就館については(3)でふれるが、ここにあげた施設の多くが第2次大戦までの戦争について、侵略戦争だという立場に立っていないことは明らかだと思われる。あるいは、その様な点を明確にすることを避けているとも言える。

例えば知覧特攻平和会館の場合である。特攻という悲惨な体験について、なくなった方への慰霊や苦しみへの共感を伝えるという姿勢はあるが、なぜそのような無謀な戦術が許されたのか、あるいはそのような状況に至ってまで戦争を継続するべきだったのか、さらには戦争そのものが正当な性格のものだったのか、といった論理的な原因追及は行われていない。

特攻戦術採用について HP で書かれているのは次のようなことである。「ところが、1942年(昭和17年)8月になるとアメリカを中心とする連合軍が態勢を回復し反撃に転じました。その後の日本軍は連合軍の強大な戦力に押され防戦一方になり、開戦から3年後の1945年(昭和20年)初頭になると、沖縄はもちろん日本本土も空襲を受けるようになりました。特に1945年(昭和20年)5月7日、同盟国であったドイツが降伏すると、連合軍の攻勢は日本だけに集中するようになり、日本全土が苦戦を強いられるようになったのです。当時、日本政府は沖縄を本土の最前線と考えていましたので、その最前線を守るために採られたのが、特攻作戦でした。この段階では、圧倒的な物的戦闘力に勝るアメリカの進攻を阻止する日本軍としては、兵士一人一人の精神力を武器とした特攻戦法しか他に手段がないとの結論に達したのです。つまり、日本の軍人が命を懸けた特攻を重ねることで、アメリカ軍にも大きな被害を与え、そうすると嫌戦気運(戦争を嫌がる気持ち)が広がっていき、お互いに損害を出したくないから、そのうち停戦になるのではないかと・・・という期待を、政府はしていたのではないのでしょうか。」( <http://www.chiran-tokkou.jp/learn/background/index.html> )

人を誘導装置の代わりに用いるなどという破滅的な方法への批判も全くなく、戦時中軍を支配した「精神主義」が無批判に是認されている。

鹿屋航空基地資料館はもっとはつきりしている。資料館の HP はまず、海軍精神を掲げ、その後具体的な精神の表れとして、必勝の信念、旺盛なる責任感、不撓不屈の責任感、を列挙している。その実例としてあげられているのは旧海軍軍人の行為である<sup>10</sup>。ここには帝国海軍の「精神」を継承していくための資料館だということが明確にあらわれている。

新潟の白壁兵舎広報資料館も同様である。資料館は HP で新発田所在の部隊から戦地に赴いた兵士たちの戦闘の記録をのせているが、それは連隊史などの記載にもとづくものであり、もっぱら勇戦敢闘をたたえ、事実経過を淡々と述べたものが大半である。

例えば「歩兵第16連隊の奮戦記録」は『歩兵16聯隊史 明治17年～明治35年』にもとづいて、新発田駐屯地援護室勤務の佐藤和敏氏が書いたものだが、明治27年9月25日の動員下令から、明治29年5月8日の平時復員までの経過を時系列にそって記述したのみであり、戦闘の実相や、中国の戦場の様子、中国市

<sup>10</sup> 「必勝の信念」

<旧海軍が東郷平八郎元帥の指揮のもと、日本海海戦に勝利したこと>

日本を打ち負かさんとして欧州から遠征してくる旧ロシア大艦隊を、対馬海峡で要撃撃破した。

これは東郷連合艦隊司令長官の必勝の信念、不言実行、及び任務完遂への最高の責任観念の現れであり、これが日本海軍全般に与えた影響は、絶大であったことを示している。

旺盛なる責任感

<第6号潜水艇が遭難した際の佐久間艇長の遺書及び艇員が最後まで持ち場を守った様>

潜水艇が未だ開発途上期にあった明治43年、山口県沖で生じた沈没事故で艇長以下14名が殉職した。その中で佐久間艇長は死の直前まで自己の職責を全うし、そして海軍100年の大計を憂え遺書を認めた。使命達成への最高の責任感の発露であることを示している。

不撓不屈の精神

<日露戦争の旅順口閉塞作戦における広瀬武夫中佐の戦いぶり>

開戦劈頭、旧ロシア太平洋艦隊を旅順に閉塞させる作戦において自らの身命投げうって任務に邁進した閉塞隊員の壮絶な戦いぶり、なかでも広瀬武夫中佐と杉野兵曹長の逸話は、強烈な不撓不屈の精神の現れであることを示している。

愛国心

<敗戦濃厚な状況の中で、太田中将の献身的に協力した沖縄県民に対する愛情の深さ>

大東亜戦争末期、米軍は沖縄本島に上陸し、徐々に日本軍を撃滅し追い詰めていった。

そのような状況で海軍沖縄方面根拠隊司令官太田中将は、海軍次官宛に沖縄県民の献身的な協力に対する感謝の電報を發しており、強い愛国心の発露であることを示している。」

鹿屋航空基地資料館 HP (<http://www.mod.go.jp/msdf/kanoya/sryou/msdf-ks/>)

民・農民の状況や彼らとの関わりなどは全くふれられていない。他も佐藤氏の手になるものであるが、全て同様であり、新発田 16 連隊がどこでどのように戦闘を経過したかを極簡単に記載するのみであり、戦争の実相や、戦争そのものの背景などには全くふれていないことが特徴である。

長岡市の山本五十六記念館も山本の遺徳を顕彰する、という性格が強い施設である。山本が日米開戦に反対していたことはよく知られており、そのことから、日本に平和をもたらすため努力した優れた軍人、という観点が強く打ち出されている。しかし山本は海軍の最高レベルの軍人の 1 人であり、対米開戦への反対はあくまでも戦争の勝利の展望の欠如という判断にもとづくものであって、今日一般に言われる平和主義とは無縁である(軍人としては当然であろう)。また彼が中国への戦争や、朝鮮・台湾の植民地支配についてどう考えていたかなどについては、全く関心が払われていない。

### (3) 慰霊施設

ここでは靖国神社と千鳥ヶ淵戦没者墓苑をあげる。

#### 1) 靖国神社<sup>11</sup>

「国民的」慰霊施設のように思われがちな靖国神社であるが、今日では一宗教法人に過ぎず、政府関係者が公式的であれ、非公式的であれ、訪れなければならない施設ではない。国家としての慰霊施設は千鳥ヶ淵戦没者墓苑であり、そちらでの慰霊行事で政府としてなすべきことはなされたこととなる。

ではなぜ今日でも多くの政府関係や議員、特に自民党関係者が訪問するのであろうか。靖国神社は敗戦まで陸海軍省管轄下の軍事施設であり、その基本理念は帝国日本のための戦争で死んだ兵士はことごとく護国の神となって、この神社に戻り帝国臣民によって祀られるとした、今日から見れば理解し難い国家神道にもとづくものである。そこを訪れる政治家がいるということは、その思想が彼らに継承されている、あるいは共感しているからであろう<sup>12</sup>。軍国のイデオロギー的支柱としての国家神道の総本山として、靖国は形を変えつつ生きながらえていると言える。その思想に立って歴史展示を行い、様々な「教育・啓蒙」活動を行っているのが遊就館である。

しかし軍事施設であった靖国神社は戦後解体の危機に陥った。そこでとられたのが以下のような措置であった。まず 1945 年 11 月 20 日に 臨時大招魂祭を実施した。これは陸海軍省廃止(1945 年 12 月 1 日)の直前に実施され、全戦没者の「招魂慰霊式」を実施したものであったが、関係者の大半は平服で出席し、軍事色を希薄化した。しかも GHQ、民間情報教育局長ダイク准将が出席したのである。ただ当時 GFQ の将校の大半は、靖国神社を軍国主義精神の支柱と見なしており、神社そのものの焼却を主張する意見が大半だったとされる。

陸海軍省廃止の直後、神道指令(1945. 12. 15)が出される。国家神道にもとづく軍事施設としての靖国神社は大きな改編(あるいは廃止)を迫られた。この時期日本国内にも靖国廃止論があった。石橋湛山である。彼は以下のように主張した。

「[略]併し又世に論議の存する如く、国民等しく罪あるとするも、其の中には自ずから軽重の差が無ければならぬ。少なくとも満州事変以来軍官民の指導的責任の位置に居った者は、其の内心は何うあったにしても重罪人たることを免れない。然るに其等の者が、依然政府の重要な位置を占め或は官民中に指導者顔して平然たる如き事は、仮令連合国の干渉なきも、許し難い。靖国神社の廃止は決して単に神社の廃止に終わるべき事ではない。」

(石橋湛山、「社論 靖国神社廃止の儀 難きを忍んで敢えて提言す」『東洋経済新報』1945. 10. 13)

<sup>11</sup> 以下靖国神社に関しては、西川重則『「新遊就館」物語』いのちのことば社、2003 年、による。

<sup>12</sup> 敗戦後の靖国神社宮司・鈴木孝雄陸軍大将は戦時下次のように書いていた。「自分の息子じゃない、神様だというような考えをもって戴かなければならぬのですが、人霊も神霊も余り区別しないというような考え方が、いろいろの精神方面に間違っただらわれ方をしてくるのではないかと思うのです。」

「自分の一族の方が神になっておられるんだという頭があるからだと思います。そうでなく、一旦此処に祀られた以上は、これは国家の神様であるという点に、もう一層気をつけて貰ったらいんじゃないかと思います。」靖国神社について『偕行社記事 特号』[部外秘 第八〇五号]1941 年 10 月/大江志乃夫『靖国神社』(岩波書店、136~138 頁)

リベラリストの石橋の達見だったといえよう。しかし意外なところに神社の存続論があった。GHQにも近いキリスト教関係者である。代表的な人物として D.C.ホルムト<sup>13</sup>がいる。彼の著書『日本と天皇と神道』は次のように論じた。

「敗戦国の人民から、たとえ名文は誤っているにせよその戦死者のために礼拝の儀式を行う権利をも奪い取ってしまう事は、戦勝国として正当な行為とは言い得ない。」(279頁)

またドイツのカソリック神父で、ローマ法王使節の任務代行を引き受けていたためマッカーサーと直接会う事が出来たブルーノ・ビッテルもその1人である。彼は1945年の10月中旬、マッカーサーの副官 H.B.ウィーラー大佐を通して覚書を提出している。そこには「戦勝国か戦敗国かを問わず、国家のために命を捧げた人に、敬意を払うのは、自然法の原則である」と書かれていた。

このような見解は、宗教者の観点から、あるいは欧米の国家的常識にもとづく提言だったといえる。同時に日本の戦争被害をもっとも深刻に受けたアジア諸国に対する配慮・関心が欠如していたことも関係しているように。

結果的に靖国神社自体は宗教法人として政府から分離して存続した。ただその宮司には旧軍人になる例がかなりあった。例えば松平永芳は、敗戦時海軍少佐であったが、後に明治神宮第六代宮司としてA級戦犯の合祀を行った。彼は旧軍関係者の中でも極めて右翼急進的思想の持ち主であり、戦後日本の政治体制を全く認めないという考えの持ち主であった。A級戦犯合祀は彼らの政治・国家体制と思想を復活させることを目的としたものだった可能性が高い。このような靖国神社の現状を考えると、慰霊ということばのもと、戦争の主導者の責任を問わないことの危険性は、何より日本の市民自身が自覚すべきことだと思われる。そして時としてなくなった方への慰霊、ということばや形式が、戦争責任や犯罪を隠蔽する道具に使われるということのを忘れるべきではない。

## 2) 千鳥ヶ淵戦没者墓苑

靖国神社が国家の施設という性格付けを失ったのに伴い、それに代わる施設の整備が求められた。主権回復直後の1952年5月1日、全日本無名戦没者合葬墓建設会(総裁・吉田茂)が設立された。この会は「無名戦士の墓に相当する施設を建設し、外国の元首、施設等も公式に訪問し得るものとするを目標としていた。」(千鳥ヶ淵戦没者墓苑の建設経緯 <http://www.boen.or.jp/Appendix21.htm> )

さらに54年9月には「無名戦没者の墓を国で建設する」(1953.12.11、閣議決定)ことも含めて、全国戦争犠牲者援護会が発足した。名誉会長には宇垣一成が就き、会長には元防衛長官で、戦時中ビルマ方面軍政最高顧問を務めた砂田重政が就任した<sup>14</sup>。同会は墓苑建設をバックアップするとともに、恩給・年金問題や戦犯裁判の受刑者家族の支援等に取り組むとしていた。

そして墓苑建設に望む基本的な考え方は、「国に殉じた戦没者を慰霊顕彰して、あまねく、戦争犠牲者を援護することは、国家、国民の義務であり、これこそは、愛国心を高揚し、日本の健全な経済復興をはかる道であるとしている」とした。

モデルはアーリントンやウェストミンスター寺院等にとられ、政府の公式行事を実施可能なものとする事とされた。しかしここには、戦争犠牲者を悼むと共に、「国に殉じた」者を悼み顕彰するという性格付けがあったことは見逃せない。さらにそれが経済復興に繋がると位置づけられていたのである。千鳥ヶ淵の慰霊施設も、本格的にかつての戦争や植民地支配の反省に立ったものではなく、「国家」のために「命を捧げた」者を国が高く評価するという姿勢を示すための施設として構想されていたのであり、そのような姿勢を国がもつことこそ経済復興への励みになる、という展望があった。ウェストミンスター寺院やアーリントン国立墓地を手本に構想された慰霊施設は、戦後GHQが喧伝した戦争史観にぴったりと寄り添い、アメリカの同盟国として冷戦構造の一翼を担いながら、高度成長に向かいつあった戦後日本政治そのものだったと言えよう。

<sup>13</sup> 1910年来日のバプテスト宣教師。東京学院教授、関東学院教授等を務めた

<sup>14</sup> とはいえ旧軍関係者ばかりという訳ではなかった。副会長には、曾根益(民社党)、三宅正一(社会党)らも名を連ね、顧問には石橋湛山や松村謙三もいた。旧軍関係では、岡村寧次と下村定が顧問にはいつている。



### 3 証言の力

以下では長岡戦災資料館などが記録としてのこした戦争証言のいくつ下を紹介する。それは2で紹介した平和記念館の活動が、戦争の実態を克明に知らせる貴重な資料になっていることの証になっているからである。そこでまず長岡戦災資料館について簡単に紹介する。

#### (1) 長岡戦災資料館

まずその目的をHPから見てみよう。

「長岡のまちが空襲を受けてから、71年目を迎えました。

燃え上がる炎の中を逃げ惑い、血のにじむ思いで戦後を生き抜いてきた空襲体験者は高齢化し、いまや市民の多くが戦後生まれの世代となりました。いま、豊かさと活気にあふれた長岡のまちで、私たちは平和をあたりまえのこととして暮らしています。しかし、世界にはいまだに戦禍に苦しむ人々が絶えません。こうしたことをよその国のことと考えずに、地球市民として平和を願いながら、関心を寄せていくことが、今を生きる私たちに求められています。

平成15年7月、長岡空襲の惨禍を記録・保存し、伝えていくため、長岡戦災資料館を開設しました。こは、長岡空襲を語り継いでいくための市民活動の場です。長岡空襲を体験された市民と、戦争を知らずに育った戦後世代の市民とが、それぞれに力を出し合い、平和のために一緒になって活動し、次の世代に平和の尊さを伝えていきます。」(HPより、

<http://www.city.nagaoka.niigata.jp/kurashi/cate12/sensai/siryoukan.html> )

空襲の記憶を記録として保存し、その体験を未来の平和につなげることが目的だとされている。

#### 1) 設立の経緯

この施設の設立は以下のような経過をたどった。まず長岡市の科学博物館に既に戦災関連資料千数百点があり、その一部が博物館に展示されていた(1999年1月より)。そこで資料の散逸を防ぎ、新たな資料を収集するため、新施設の設立が検討されるようになった。その後市議会等からも要望があり、設立が決定する。

基本的な考え方は「年々戦災体験者が減少する中、この度市民待望の戦災資料館が実現した。開設の趣旨は長岡空襲を風化させることなく、次世代に語り継ぎ、平和の尊さを伝える市民活動の場を設けることである」<sup>15</sup>という記述に集約されている。

具体的には2003年5月、企画運営委員会が発足し、展示内容の検討に入った。その後東京大空襲・戦災資料センター<sup>16</sup>や昭和館等数施設を参観して展示方法や内容を決めていった。その結果まとめられたのが以下のような展示内容である。

#### 展示品

1. すさまじい長岡空襲 2. 焼野原の長岡 3. 日本全国に及んだ空襲の惨禍 4. 火の海を逃げて(証言、パネル、油彩画等) 5. 長岡空襲殉難者名簿 6. 戦中の暮らし 7. 児童生徒の生活 8. 戦後の暮らし

こののち資料館は体験者の証言活動等も展開し、戦争証言集の刊行や、小中学生などへのかたり聞かせ等活発に活動していくことになる。またこの施設は市が設立と運営に深く関わっている珍しい事例でもある。

#### 2) 戦災資料館の活動

以下設立後の活動を時系列で列挙する。

2003年度 7月21日 空襲体験座談会 小林亨氏 参加者50名

2004年2月『長岡空襲体験記録』刊行 2004年度

7月10日 空襲体験座談会 長谷川久氏、石沢郁子氏、参加者60名

8月1日-5日 空襲体験談の聞き取り会 参加者7名

2005年度 学徒勤労動員を取り上げる。6月から翌年2月まで連続9回実施。

<sup>15</sup> 「『長岡戦災資料館』ができた」『にいがた教育情報75』2003年

<sup>16</sup> 委員会の委員長として取りまとめに当たった内山弘氏は、東京大空襲・戦災資料館が「一番役に立った」と話しておられる。(兒嶋による2016年3月25日の内山氏へのインタビューによる)

長岡中学、長岡実業女学校、長岡工業学校、長岡高等女学校、長岡商業学校、長岡高等家政女学校、旧制上組農学校、旧制長岡工業専門学校、長岡女子師範学校、の昭和20年在籍者から2006年度国民学校生の体験

昭和20年度5・6年生：6月17日 8月17日 9月24日 10月22日

参加者は最大120名、最小52名

2007年度 学童疎開生と特攻隊員の話しを聞く。5月9日 国民学校生3名、海軍予科練2名

6月23日 ガダルカナル・ビルマ戦線の体験者

7月21日・8月11日 長岡空襲体験者

2008年度 6月7日 7月12日 長岡空襲体験者 7月は長岡赤十字当時看護婦だった方2名

その他) 長岡空襲史跡回り、体験画募集、「長岡平和フォーラム」開催、「九国民学校区の長岡空襲喪失図」作成、「一九四五・長岡戦災焼失図」作成、遺影収集 (以上『語り継ぎたい長岡空襲』長岡戦災資料館編より)

このように体験者からの聞き取りが精力的に行われた。その成果は現在7冊の証言記録、『長岡空襲の体験記録』として残されている。そこには計117の証言が記録されている。その内容は、空襲体験記97件、勤労動員13件(証言記録III所収)、軍隊・戦場体験7件(証言記録IV所収)にわかれる。ただし空襲体験記は体験時の年齢や地域などで内容は様々である。以下に幾つか紹介する。

### 3) 証言記録から

#### [空襲体験]

#### 1 佐々木暁子「軍国少女の目覚め」

戦時下の生活と教育のもとでの自身の変化。防空壕から田んぼに逃げ出して、B29が焼夷弾を投下するのを見ながら生き延びた体験。敗戦の日にも揺らがなかった神風思想、敗戦後の窮乏生活、進学とそこでの新しい教育、その後の生活等が語られており、敗戦前後を生き抜いた女性の貴重な記録になっている。

「田んぼに薄い布団を敷いて、そこにおばあさんを連れて行って、それから私について来た三番目の弟をそこに置いて、私もそこへ行って上から布団をかぶって、そして空を見て、ああ、覚悟しんとだめだよ。もう目の前に来ているから、[略]これが落ちてくるんだから、そしてずっと飛行機(B29)が来て焼夷弾を落とすんですね。途中で炸裂する時は、私今でもはっきり覚えているんだけど、どす黒い赤とどす黒いまでに思われるような緑、閃光ですね。ばあっと、広がって、ああ、あれが落ちてくるんだ、もう覚悟しようと言って布団をかぶったんですけど、風の向きが変わったのか、宮内の駅の方、そっちの方に流れいき落ちたのです。」(『長岡空襲の体験記録 VI』77~78頁)

#### 2 佐藤武夫(11歳)「父は押し入れに逃げ、そこで焼死した」

実家は魚屋、父親は軽い中風で歩くことはできたものの外出を嫌っていた。その父の最期を空襲後確認している。

「私B29のものすごい爆音で目が覚めた。障子戸が真っ赤に染まっていた。慌てて階段を下りてみると誰もいなかった。母と姉たちが父を外に連れ出したのだろうと、その時思った。[略]八月四日になって、ようやく我が家の焼け跡に行く気になり、十一時ころ行ってみたら、板切れに伝言を書いた看板が立っていた。それは、父と私への知らせで、「無事だったら四日の午後、ここに来るように」と書いてあった。[略]家の片隅で未だくすぶっているところがあった。湯気が立ち昇っていた。そこは一階の押し入れの部分だった。私は何気なく瓦礫をどかしてみても仰天した。戦後六十年たった今も決して忘れることのできない無残な姿を見た。半分焼けて白骨の出た父の遺体が横たわっていた。父は押し入れの中に逃げていたのだ。午後家族と再会できた。母と姉たちは父の遺体を見て泣き崩れた。母は、父を連れ出せなかったことを遺体にすがって詫びた。」(『長岡空襲の体験記録』59~60頁)

#### [軍隊・戦場体験]

#### 3 丸山進次郎「朝から晩まで、怒られ、殴られ、走らされた予科練」

海軍甲種飛行予科練習生 長岡中学二年後半に受験。1945年2月末か3月初めに合格の通知。滋賀海軍航空隊へ。航空兵の希望はすでに消え、特高訓練の日々となった。

「時局の変化により、7月から、我々は海軍陸戦隊に組み入れられた。ある日、分隊長から悲観すべき話があった。『空母瑞鶴を始め、航空母艦はない。またお前たちの乗る飛行機もない。本土決戦あるのみ。』という内容であったと記憶している。それでも、幼稚な我々は、日本が負けるなんてちっとも考えていなかった。しかし、その日から訓練の内容がまるっきり変わってしまった。[略]上官の訓示では、敵の M1, M4 戦車に対し、座布団型爆弾を抱え、戦車のキャタピラーを破壊する訓練であった。」(『長岡空襲の体験記 IV』70 頁)

#### 4 町永竹松 「家族の盾になるため志願した海軍予科練」

海軍甲種飛行予科練習生 1942 年 12 月に繰り上げで長岡工業を卒業、新潟鉄工に入社。その後予科練に志願。44 年 3 月坂之上小学校で集合し美保海軍航空隊(鳥取)に行く。敗戦時の異常な精神状態が記録されている。

「下に兄弟が沢山居りまして、八人兄弟の私は二番目でした。戦争に負けると、自分の身というよりは、家族が悲惨な目に遭うんじゃないかという気がして、じゃあ俺が盾になってやろうという気になり、[略]志願しました。」(同上書 75 頁)

敗戦当日。「リーダーシップをとっていた者が、『終戦になっても俺は負けない』と言い出し、みんなで2 晩くらいを過ごしました。その後には、『我々は白虎隊なんだから自決しよう』と言い出し、小さい人から順に血書をとりに始めました。私は、『まってくれ、ここで死ぬのは無駄死にだ。復員する途中で敵国兵に会うかもしれない。その時に1人でも2人でも殺して自決しよう。』と言い、それで自決は止めになりました。あの雰囲気を出すと、今でもぞっとします。」(同上書 83~84 頁)

#### 5 栗原貞次郎 ガ島・ビルマ方面戦没者慰霊碑保存会会長

1942 年 6 月フィリピン、ミンダナオ島へ。9 月 18 日ガダルカナル上陸。餓えた記憶がリアルに書かれている。

「草まで食べたガダルカナルの戦い」

「ガダルカナル島では、既に先発隊が戦いに負け、敗残兵になっていました。制空権・制海権はアメリカ軍に握られている状態だったので、[略]海軍の潜水艦と駆逐艦に乗って上陸しました。上陸した海岸から少し行った地点で昼食をとったんですが、その時に部隊の一個小隊が爆撃に遭い、全滅しました。傷はほとんどなく、爆風による圧死でした。円陣を組んで食事をしていたそのままの格好でした。」(『長岡空襲の体験記 IV』88~89 頁)

「一人当たりの食料は非常に少なく、兵の中で飢えによる衰弱が進んでいきました。9月に上陸、10月に本隊が来て、昭和 17 年 1 月 1 日の米の配給は、1 人の量が盃一杯位のもので、その後は無配給でした。とにかく食料が不足し、その島の生物、あらゆる草を食べました。私は海岸線の近くにいたので、海水を3分の1くらいに薄め、草を放り込んで煮て食べました。」(同上書 90 頁)

[勤労働員]

#### 6 赤石カズミ(16 歳) 「私の人生は長岡空襲で変わった」

津上製作所へ学度動員。そこで米軍の捕虜の扱いを実見している。

「私の仕事は、出来上がった製品(武器)を長岡駅までアメリカ兵の捕虜たちと一緒に運搬することでした。捕虜は下長岡駅近くの収容所において、朝になると十人くらいが津上製作所に来ていました。いつも日本兵が二人くらい監視していました。捕虜はとても礼儀正しいようでした。[略]捕虜兵たちは雪の降る寒い中をわらを着せられ、手袋も履かず、重いソリを引かされたのです。私たち女学生もそれを手伝いました。雪だまりで思うようにソリが動かなくなると、日本兵が竹の棒で捕虜を叩くのです。女学生は叩かれたことはありませんでした。捕虜の昼食はいつもサツマイモだけでした。[略]あの時の捕虜の様子が目に焼き付いています。無事にアメリカに帰れたのだろうか、戦後いつも思い出しました。」(『長岡空襲の体験記』II 10~11 頁)

#### 7 安達アイ子 旧制長岡高等女学校

「学校が陸軍の縫製工場」

「昭和十九年には、学校には、軍需縫製工場となり、運動場と教室にミシンが入り、授業は余りありませんでした。ノルマがあって、達成するには、それはそれは大変でした。[略]糸綿ほこりが沢山出るので、それを吸って病気になって休む人も多くいましたし、私も心臓を患いしばらく学校を休みました。」(『長岡空襲の体験記 III』10～11 頁)

8 原田新司 旧制長岡中学 北越製紙で勤労働員、戦後新潟大学(旧制新潟高校から転換)から新潟日報。日本政府の戦後処理の無責任さなどがきちんと指摘されている。

「学校警備で命拾いして」

「高校一年(旧制新潟高校、その後新潟大学)の時、隣の席にいたのが小説家になった野坂昭如君です。[略](彼の作品には)私とよく似た体験が描かれています。[略]都市に対する空爆は戦争犯罪だとよく言われています。第一次大戦後に決められた国際条約にも反しているからです。しかし、戦争が始まると誰も守ってくれないのです。日本軍もそうでしたし、現在の大方の戦争も同様で、多くの市民が死んでいます。」

「それからもう一つ、靖国神社にからむ事です。靖国神社には戦災者は祀られていません。国は戦災者の事はほとんど認めていません。従って政府補償はされていません。軍人恩給は復活していますが、戦災者には全く手当がなされていません。これは他の国と違います。ハンガリーやドイツは戦災者にも補償をしています。それだけ日本の戦後処理はいい加減だと思っています。」(『長岡空襲の体験記録』III 78～79 頁)

9 山田重行(旧制長岡聾啞学校中等部三年生)

聾啞学校中等部の夏休み、実家に戻らず寮から勤労働員中に空襲に遭う。なお目が見えない生徒は実家に戻っていた。

「中等部は、合わせて十五人くらいだったと思いますが、寄宿舎にいました。夏休みなので小学部(当時＝初等部)は家に帰って寄宿舎にはいませんでした。休みなのに寄宿舎にいたのは、学徒勤労働員で工場に働きに行くためでした。北越製紙の工場に寄宿生、通学生の男子も女子も朝から出かけていきました。[略](灯火管制のもと友人と寝付けないので雑談し、部屋に帰った十時半ごろ)アメリカ軍の飛行機が襲来し、警察が空襲警報のサイレンを鳴らしました。それを聞きつけた先生が二階にかけ上がりみんなを起こしたので目を覚ましました。[略]目を覚ますと、明るくて熱いのです。何かと思って外を見ると、目の前も裏手のほうも燃え上がっていました。[略]運動場の前は人家もなく、田畑の中に水道タンク(中島浄水場)だけが立っていました。町の人々が田んぼの中の道をどンドン逃げていきます。女の橋村先生も駆けつけられて、私はその班に入り、後ろは坂井先生、校長先生の班にそれぞれ分かれて、先生を先頭に縄につかまり逃げました。[略]土手から見ると、遠く小千谷の方角にある軍の武器を作っている有名な精密工場が、爆撃を受けて燃えているのが見えました。」(『長岡空襲の体験記』VII 78～82 頁)

以上幾つか紹介して来たが、ここには単なる空襲体験記ではない記録があることが分かる。戦前の軍国体制への暗黙の批判や、日本の戦後処理などへの論理的な批判などである。また動員された捕虜の扱いの記録もある。聾啞学校生徒の勤労働員体験、そして空襲の被災体験などは全国的に見ても貴重な記録だと思われる。苦しかった生活体験そのものが、庶民にとっての戦争の実態を明らかにしている。

次に新潟県津南市で1988年に刊行された証言記録『体験記 女たちの戦争』を紹介したい<sup>17</sup>。この証言記録は津南の公民館を拠点に活動した、地域の女性たちによる戦争体験記録集である。

刊行の目的は「戦争は遠い過去の出来事と考えがちですが、現在なお、米・ソの歴史的な歩み寄りがあったとしても世界の情勢を見ますとき、潜在的戦争状況にあることはたしかであり、その火種として、イラン・イラク戦争が相変わらず緊張状態にあることも事実です。当時、戦時下において女性は銃後を守り、家庭・郷土を守るために懸命でした。振り返ってみれば、その頃は戦争をすることに少しも疑いをもたなかった私たちでした。けれど今過去の歴史を思い返してみる時に、戦争は決して許してはならないことだという責任を感じます。[略]『戦争』が忘れ去られる現在『中国残留孤児の親探し』という報は傷口をおおった『かさぶた』を引きはがす行為に似て心をえぐられるような思いで、戦時下の諸相を思い出させます。」(『体験記 女たちの戦争』4 頁)とある。

戦時下で自分たちが果たした役割を再検証するための活動であり、国際情勢やあるいは中国残留孤児という日本の満洲支配との関係に触発されたことが理解される。また女性たちの活動であることから、この地域

<sup>17</sup> べんきょうするお母さんたちの広場編集部『女たちの戦争』1988年初版発行、2004年再版発行。

に女性のエンパワーメント活動・ジェンダー的な活動が広がっていった中での取り組みだったと推察される。

3年間かけて集められた記録には110編の証言がのせられている。その内容は、「耐えしのんだ暮らし」、「その時子どもたちは・・・」、「外地から生還して」、付録資料からなっている。「外地から生還して」はほとんどが満洲開拓団の経験であり - その他は従軍看護婦 - その点からも残留孤児問題が大きな衝撃だっただろうと推定できる。何れにせよ、ジェンダー的自覚の深まりと、国際的関心、そして旧満州との関わりから、自分たちの戦争体験の見直しが行われた、その成果だと言えよう。各証言の内容は必ずしも自らの加害責任や、戦争への客観分析に繋がっていないが、戦時期庶民の貴重な体験記録であることは間違いない。

#### 4 平和記念館の役割・戦争の総括 : 記録保全の体制確立を

以上を整理すると以下のようなことが言えよう。

- (1) 保坂や吉田の分析が示しているように、私たちの戦争観・歴史認識は戦後のGHQの宣伝や、旧軍幹部たちが残した記録や書籍によって大きく影響を受けて来た。彼らが残した戦争観や歴史観は、旧軍の過ちを隠蔽し、自らの責任を回避する性格が強かった。また第一線兵士や、庶民の体験は全く無視され、戦場や戦時下の生活の実態は語られてこなかった。
- (2) 戦友会などは選挙の際の集票組織として機能し、一定の政治的力を発揮した。
- (3) 靖国神社は形を変えながら存続し、その内部では帝国日本の思想がそのまま生き続け、それが遊就館に端的に表現されるようになった。遊就館は展示とさまざまな活動を通じて、戦前・戦中の思想の拡大を図っている。
- (4) 顕彰型の施設の多く、また自衛隊施設の一環としての顕彰施設は、旧軍の精神を肯定的に継承する性格をもち、遊就館ほどではないが、先の大戦や帝国日本のあり方には無批判である。
- (5) 平和記念館は証言記録の蓄積や様々な広報・教育活動を通じて、平和運動を - 館によっては国際的連帯の下で - 進めることで、日本国家の加害責任や、戦争責任・戦争処理の問題点を追求するようになって来た。戦争や帝国のあり方を市民の立場から粗飯的に検討し、再構成する努力をしてきたと言えよう。それを可能にしたのは、長期にわたる証言の蓄積や、その整理のための研究者との連携である。
- (6) 戦前の軍国主義的ファッション体制は日本を破滅に追い込んだだけでなく、他の諸外国・地域、中でもアジアの多くの国と地域を破滅的な事態へと追い込んだ。今日日本がそのような体制から脱却できたのは、中国や朝鮮における反帝国主義の戦いがあったからであり、成功しなかったが国内でそれと連携する戦いがあったためでもある。しかしそういった事実は歴史の記憶から消されかけてきた。それを呼び起こして来たのが平和記念館やそれと連動した運動であり、それとともにあった研究者の仕事であった。同じ過ちを繰り返さないためには、蓄積されて来た平和記念館の活動に改めて注目する必要があるとともに、それを公的な活動の一部として展開していくことが重要である。
- (7) そのためには日本政府による情報公開の徹底と、様々な記録の系統的な蓄積と保全が不可欠である。そのためには市民がより強く声を発し行動する必要があるだろう。

#### 5 まとめ—新潟県の特徴

最後に新潟県の特徴を考えてみたい。県内には平和記念館の性格が強い長岡戦災資料館があり、三条市歴史民俗産業資料館も、2015年の夏には戦争関連展示を行っている。またここではふれていないが、長岡市にある新潟県立歴史博物館も、常設展示の近現代の部分で、新潟県の歴史の一部として戦争の時期を扱っているがその比重は低い。ただ過去の企画展示の中では、山本五十六の新発見資料の展示などを行ったこともある。ただ明確な観点から戦争の問題を位置づけているとは言えない。これはしかし新潟県だけでなく、日本の公的な大規模公立歴史博物館に共通する特徴であり、近現代の位置づけが未整理なため展示が回避される傾向が強いのであり、新潟の場合も例外ではないと言える。

その中で長岡戦災資料館は、市が積極的に関わるたちで設置され運営されている。空襲体験を軸に戦場体験や、勤労働員の実態の証言が記録として残され、幾つかのケースはビデオ化されて語りの様子を再現することも可能である。事実上市立のこのような施設は全国的に見ても稀であり、戦争の記憶の集積と後世への

継承に市が積極的に関わっている優れた事例と言えよう。ただ個人や民間ベースでの平和記念館といったものは弱く、この点は新潟県の一つの特徴である。

県内の顕彰型施設に関しては、新発田市の自衛隊駐屯地内にある白壁兵舎広報資料館と上越市の高田の師団長官舎、そして長岡市の山本五十六記念館がある。新発田の兵舎の活動の方向性は他の自衛隊関連の施設の方向性と基本的に軌を一にしていると言えよう。その歴史認識の基本は、新発田の部隊の歴戦の経緯を忠実に記録するというところにあり、それ以上でもそれ以下でもない。

山本記念館の場合は地元の偉人をたたえる、ということが第一であるが、そのたたえる観点は山本が対米戦争回避を主張したという所に基礎をおきつつ、軍人として人間として優れた人物だったとするものであり、彼の思想や行動を全面的に検討するという姿勢はない。ただこのような施設があることで、様々な資料が調査収集され、関係者との人的ネットワークが維持されていることは事実であり、それは貴重な貢献と言える。なお山本に関しては長岡市郷土資料館にも彼のコーナーがあり、山本着用の礼服をはじめとする遺品が陳列されている。基本的な観点は、山本記念館同様だと考えられる。

新潟県の特徴は、個人や民間団体による平和記念館の活動が弱いこと。その反面長岡戦災資料館のような、市が深く関わった施設が設立され運営されて来たことである。その背景には言うまでもなく長岡空襲という深刻な体験があった。しかし東京大空襲の体験のある東京都に、都が設置運営する施設がないことを考えれば、長岡市の努力は高く評価されるべきである。ただし公的な性格をもつ館であるが故か、展示などを見ても戦争の加害の側面などをきびしく見る観点は弱い。ただし蓄積された証言にはこの点にふれるものも存在する。また津南市の『女たちの戦争』の刊行は、新潟県内の女性の活動の記録として貴重であり、全国的にも高く評価されるものと言えよう。

新潟県内にも様々な観点からの施設が設置されている。それらの施設が何らかのまとまった観点からの歴史認識を、特に近現代史について、示しているとは言えない。しかし各館の活動を通じて記憶が記録として残され、多様な戦争体験が率直に記録されることとなった。戦争の時代の記憶を後世に記録として残して来た長岡戦災資料館の活動や、津南の女性グループの活動は貴重であり、今後継承されるべきものと言えよう。





文部科学省「地(知)の拠点整備事業(平成25～29年度)  
文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」  
長岡大学COC+事業＝長岡地域＜創造人材＞養成プログラム  
平成28年度 長岡大学地域志向教育研究ブックレット vol.2  
新潟における戦争の記憶

【著 者】 児嶋俊郎

【発行日】 平成29年3月21日

【発 行】 長岡大学地(知)の拠点整備事業推進本部  
長岡大学地域連携研究センター

〒940-0828 新潟県長岡市御山町80-8

T E L 0258-39-1600(代)

F A X 0258-39-9566

<http://www.nagaokauniv.ac.jp>



長岡大学地域志向  
教育研究ブックレット